

「名大サロン」の三十八回目は、地球水循環研究センターの安成哲三教授が登壇。「地球学の提唱」進化論とガイア論の超克をめざして」と題して講演した。

○一九九六年から、シベリアのタイガ、モンゴルの草原、チベットの高原、東南アジアの熱帯林までの地

# サロンの 名大 主役

域で気象観測ネットワークを展開した。これまでの観測の結果、豊かな森林や水田農業が水の活発な蒸発散と雲を形成し、降水活動を促すという循環になっていることが確認された。森林や水田などの生命圏が気候や自然環境を維持・形成しているとするれば、生命が気

## 地球水循環研究センター・安成哲三教授



講演する安成教授

# 生命は環境と相互作用

候、自然環境に適応あるいは、温室効果ガスである炭素ありながら、その最近の活は、選択をして進化すると命が、ただ与えられた環境化窒素や二酸化炭素は、光動は外力になっている。典というダーウィンの「進化に適應するだけという考え合成する生命の進化で抑制型的な例が二酸化炭素を増論」と矛盾しないか、という方を退け、その代わり、環境され、気温はほぼ一定に保やし続けている温暖化だ。疑問がわく。行き当たったを改変していくと考える。たれてきた。光合成する生結局、ガイアとは、地球全命が誕生した二十数億年前命が誕生した二十数億年前体として光合成活動を最適と生命を包括した一つの生生命すべてが環境と相互作用に、大気中の酸素の濃度が化するシステムではないの命体として機能し進化して用を続けているとみる。跳ね上がっている。ガイアか。人間はガイアにおいて最も弱い立場にいな

きたというシエームズ・ラ ○四十億年間の地球大理論にも問題点がある。見うな、外力を与えている存ブロックの「ガイア理論。 気と気候の進化を見ると、方によつては「合目的論」在だ。と同時にガイアの仕進化論を踏まえた新しい理 太陽活動が強まったの対(ある目的を持った見えざ組みを認識しているのも人う答えるのか。見えざる手任のある立場になっている

は「科学」と言えるのかとことを忘れてはいけない。



という議論もある。ガイアすなわち気候、自然環境と生命圏が一体となったシステムに影響を与える外力は、一九七一年、京都大理学部卒、筑波大教授を経て二〇〇二年より現職。太陽活動、火山活動、隕石(次回は二十八日。講師は文学研究科の塩村耕教授)は文学研究科の塩村耕教授